

# 情報ワイド



©Julian Mommert



## ダンス!? 演劇!? 独創の舞台



©加藤甫

パイオアヌーは世界でトップの舞台演出家。口本見られると巨体がすごい。彼の舞台はダンスだけでは語れない。劇的で幻想的な「出来事」と表現した方がいい。舞台を見るよりも美術館に個展を見に行く感覚の方が近い。

### 劇的で幻想的

ダンサー・振付師 平原慎太郎さん

対する愛情、ユーモアを感じた。卓越した才能人間としての基本的な優しさの両方を持ち合わせていて、それが魅力ある作品に反映されているかと思う。彼の作品には揺らぎがある。例え、舞台に横たわるときにかけられた布をめぐるといった一つの動作をゆくりと時間をかけてみせる。そうすることで、体感する時間が変わる。1分が10分に、10分が1分に感じられるような感覚を味わうこともできる。

ディミトリス・パイオアヌー 『TRANSVERSE ORIENTATION』 開催日時 8月10日午後7時、11日午後2時 ※11日は上演終了後、パイオアヌーによるアフタートーク(日英通訳あり) 会場 ロームシアター京都サウスホール(京都市左京区岡崎最勝寺町) チケット 全席指定 1階席6千円、2階席5千円、ユース(25歳以下)3千円/18歳以下千円 ※未就学児入場不可 問い合わせ ロームシアター京都チケットカウンター075(746)3201 主催 ロームシアター京都、京都市 後援 駐日ギリシャ大使館、京都新聞

独創的な舞台で世界的に注目されるギリシャの振付師ディミトリス・パイオアヌーの最新作『TRANSVERSE ORIENTATION』が8月10、11日の2日間、京都市左京区のロームシアター京都サウスホールで上演される。京都新聞後援。日本では埼玉と京都の2カ所だけだ。パイオアヌー作品の魅力、アートジャーナリスト小崎哲哉さんとダンサー・振付師の平原慎太郎さんに聞いた。

北村哲夫

ンサーで振付師のピナ・バウシユが亡くなった後、彼女が率いたラッパタル舞踏団で初のゲスト振付師として新作を発表し、話題を集めた。約3年ぶりの来日となる今回、披露する『TRANSVERSE ORIENTATION』は当初、20年のアウニオン国際演劇祭のオープニングに予定されていたが、コロナ禍で中止となり、21年に初演された。タイトルの意味は、蛾などの昆虫が、月などの遠方の光源に対して一定の角度を保ちながら飛ぶ感覚反応のことという。



アートジャーナリスト 小崎哲哉さん

### 現代の「活人画」

てきたらギリシャ神話のミノタウロスを想像する人もいれば、闘牛を思い出す人もいるだろう。様々なシーンがあるが、すべて二幅の絵画のまじりに楽しむことができる。ある意味で現代アートのでもある。例え、作品には梯子が登場するが、作者は意味を説明しない。聖書にある「ヤコブの梯子」を想像する人もいれば、別の物語を考える人もいるだろう。イメージーションを刺激する。全体がほぼモノクロームでスタイリッシュな舞台で、全裸のパフォーマーもいれば、同じ舞台にスーツを着たパフォーマーもいてこの対比がいろいろなことを考えさせる。私たちは社会的規範の中に生きていて、本来裸になる自由がある、といっているのかもしれない。表面は装っているが中身は裸といっているのかもしれない。自由に連想すればいいのだが、そのヒントがいろいろあるのが魅力的だ。今作はコロナ禍で公開が遅れたがその間ずっと練習を重ねてきたという。ただでさえ肉体的も技量も身体能力も高いパフォーマーがさらにパワーアップした舞台になっていると期待している。